

山にかける虹の夢

田 中 利 男

風が頬に冷たく感じ、山の木々が色付き始める季節になると毎年のように思う事があります。それは、空に虹がかかるように、山野にも「紅葉」の色調の違いによる「木の葉の虹」をかけてみたいという事です。

遠くに見える山に、赤・橙・黄・緑・紫等の帯がくっきりと浮かび上がる風景を想像しながら、イチョウの濃い黄、ニセアカシアの薄い黄、カラマツの茶がかかった黄、ハウチワカエデの濃い赤、ナナカマドの真紅の赤、エゾヤマザクラの薄い赤、そして、ブンゲンストウヒの白っぽい緑、イチイの黒っぽい緑、ところど

ころにヤマブドウのまだらな紫、青い葉はチョット無理だろう……、さらに欲張って、春は、キタコブシの白とエゾヤマザクラのピンクのコントラストも楽しみたいし、散策路ができるならば、香も色々楽しみたいのでホウノキ等も、シラカンバの白い木肌も、ブナの黒い艶やかな木肌も捨てがたいし、小動物の食用になる実をつけるミズナラやオニグルミもあつたほうがいいし、昆虫が好む樹液を出す樹もところどころに植えて……等と考え出すと切りがありません。

虹をかける場所としては、平地から良く見える山肌の傾斜地を幅50m距離2km程確保すると面積は10ha、広く長く見応えのあるように100m×10kmにすると1000ha(三〇万坪)の土地が必要になり、経済的価値の低い雑木林を前提に一坪三〇〇円として超破格に見積っても土地代九〇〇万円、苗木代と植林の人件費と育成期間の維持費を考えると億単位の資金が必要になる。とても個人が負担できる金額ではないが、公園事業又は観光開発として行政に係わるのであれば、資金的には実現可能性が高いと思われる。既存の自然の中にある木を並び換えるだけであるから植樹の工法に配慮さえすればを環境破壊の問題も起きな

いと思われる。

空想から醒めて現実に戻ってみると、樹種により成育速度に大きな違いがあり、成木の樹高にも差がある。どう考えてもシラカンバとイチイとエゾヤマザクラが苗木から成木まで肩を並べて育つとは思えず、また、紅葉の時期も期間も樹種により様々で、同一種の中にも個体差がかなりあり、生育地の土地条件、年毎の季候条件の差を考え合わせると、帯状の虹が現れるのはいつの事やら……。また、周辺の森林の伐採等の経済活動の阻害要因になる可能性もあり、人間の好みを自然界に持込む事によりその勢力関係に影響を与える可能性もある。

しかし、地球温暖化等の自然環境問題を考えると、森林は益々重要になる事であり、あまり活用されていない山野を利用しながら、自然環境に関心のある人々の知恵を結集して、自然の営みに合わせ、遠大な構想の元に気長に「木の葉の虹づくり」を実践し、森林の重要性について多くの人々に関心を持ってもらう機会を作る事も有益であろうと思われる。